

まえがき

関西大学で2016年7月31日(日)に「エジプト学研究セミナー」を開催しました。このセミナーでは、現在エジプト学研究の第一線で活躍されている専門家をお招きし、古代エジプトの初期王朝時代、古王国時代、新王国時代、第三中間期(リビア王朝時代)の歴史をテーマとした講演をしていただきました。各講義ともに充実した内容となり、それぞれのテーマの概説に加えて、研究史や近年の研究動向の報告を含む本格的な講義となりました。

当日、実に多くの方々にお越しいただくことができました。講師の先生方の力量と日本でのエジプト学への関心の高さをあらためて確認することになりました。ご多忙ななか、講義をしていただきました講師の先生方と、ご来場いただきました多くの方々に感謝申し上げます。

今回のセミナーを開催した背景には、日本のエジプト学がどうなっているのか、あるいは、今後どうなるであろうかという思いがありました。日本には、エジプト学科というものがいまだにありません。日本の人文系の学問が閉鎖的で遅れていることは言うまでもありませんが、経済成長に重点を置いてきたかつての日本にはエジプト学という、いわば見返りが期待できない分野にはエネルギーをかけることができなかつたのでしょう。

日本のエジプト学者は、その学問的背景が多様です。日本で勉強した研究者、フランス、アメリカ、イギリスなど海外で勉強してきた研究者が混在し、その専門とする分野も、考古学、歴史、美術、言語など多様です。そして、その数少ない研究者は、たとえ研究職を得たとしても、エジプト学科がないため組織のなかで自らの強みを発揮できない状態にあります。若い研究者への職は、厳しい人文系のなかでもとりわけ厳しいでしょう。

日本のエジプト研究は、今日では国内での地道な研究の蓄積や海外での留学経験によって、国際的にも悪くはない水準に達そうとしています。ただ、現状のように組織として分断していれば、今後も日本のエジプト学の苦境は続くでしょう。今回のセミナーには、せめて日本のエジプト研究者が研究遂行のために有用な連携が取れないであろうかとも思いました。

今回のセミナーの講演者は、日本のエジプト学者の縮図の感じがします。アメリカのジョン・ホプキンス大学で学位を取られた河合君、イギリスのオックスフォード大学で研鑽を積まれた中野君、日本での研究を積み上げてこられた藤井君がおられ、加えて、今回おまけで話をいたしました私はカイロ大学で学位をいただいています。

このような日本の研究者の連携が、今後の日本のエジプト学の発展に寄与することができればと考えていますし、また、そうしなければならないと思っています。海外では、エジプト学は一流の大学の証しです。日本という国にふさわしいエジプト学が、特に若い人たちの間で実を結ぶことを願っています。

最後に、このセミナーの講義をまとめて出版するにあたり、講師の先生方にずいぶんと無理をお願いいたしました。感謝申し上げます。また、この講義集の編集には、リサーチ・アシスタント(RA)の肥後尚君に格別の努力をしてもらいました。感謝しています。

吹田 浩